

ホワイトカラー農民の出現 ——タイ南部のアブラヤシ栽培と人々の生活世界——

藤 田 渡 *

White-Collar Farmers: Oil Palm Cultivation and the Living World in a Southern Thai Village

FUJITA Wataru*

Abstract

This article examines the role played by oil palm cultivation in transforming the living world of farmers in a village in Southern Thailand, based on the interaction between villagers' actions and reactions by the environment. The mode of living in the research site had been self-sufficient in terms of paddy cultivation and utilization of surrounding natural resources. However, the introduction of a modern style of rubber cultivation in the 1970s, followed by oil palm cultivation in the 1980s, completely changed the village's socio-ecological order. These two crops cover the entire village besides residences. The villagers purchase all food materials and even drinking water, and they enjoy a modern way of living fully equipped with electrical appliances and cars. The elders in the village still remember—and somehow miss—the past life, while the youth, mostly college graduates, have lost their ties with the natural environment in daily life.

Oil palm, in spite of its smaller cultivation area, has played a more vital role than rubber in transforming the living world of the village, because harvesting and selling the fruit are outsourced to middlemen's labor. Some villagers employ labor for rubber tapping and harvesting. This system enables the villagers to be “white-collar” farmers. Although there are attempts by some villagers to reduce their living costs and secure food safety by cultivating upland rice and vegetables for self-consumption, it is difficult for them to drastically change their livelihoods and become completely self-sufficient. What appears at first glance to be a rich village is in fact vulnerable to both natural and market conditions.

Keywords: oil palm, living world, middle-class farmers, Southern Thailand

キーワード：アブラヤシ、生活世界、中間層の農民、タイ南部

* 大阪府立大学人間社会システム科学研究科：College of Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University, 1-1 Gakuen-cho, Naka-ku, Sakai-shi, Osaka 599-8531, Japan
e-mail: watarufujita@gmail.com
DOI: 10.20495/tak.55.2_346

I はじめに

「ブーケットからサムイ島までの飛行中、保護区の小さな森があった以外、ゴムとアブラヤシしか見えなかった。広大な国有林は消えてしまった」。*[Hot Topic, Voice TV, 22 August 2012]*

テレビ番組のインタビューのなかで、当時の国立公園野生動物植物局の局長、ダムロン・ピデートはそう語った。

東南アジアのアブラヤシ栽培のなかでタイが占める位置は、量的には非常に小さい。インドネシアとマレーシアで世界の80%以上を生産するが、タイは3%程度に過ぎない。生産効率でもこの2カ国には太刀打ちできず、タイ政府はパーム油の輸入を原則として禁止している。ただし、タイにおけるアブラヤシ栽培には、インドネシアやマレーシアにはない特徴がある。それは、独立の自営小農民による栽培が中心だということだ。現在、栽培が拡大を続けているインドネシアでは、従来の大規模プランテーション開発中心から、徐々に自営小農民による栽培の占める割合が増えて来ている。この変化が農村をどう変えるのか。タイ南部はその意味では先進的な事例である。

本稿では、タイ南部の調査村において、アブラヤシ栽培が広がった経緯、それにより、人々の生活や社会、生態環境がどう変化したのかを整理・分析する。その際、以下の点に特に着目する。

一つは、ほかの商品作物との違いである。田中〔1990〕は、大規模プランテーションで栽培される作物が徐々に小規模な農民によっても栽培されるようになったことは、これまでに多くあったことを指摘する。様々な商品作物のブームに乗り柔軟にそれを取り入れてゆく農民がいた。彼らは、プランテーション作物を焼畑と組み合わせる。基本的に家族労働による低コストの栽培形態をとることが多い。水田など食用作物の用地をつぶしてプランテーション作物栽培を行う場合でも、価格が下がればまた食用作物栽培に戻る。田中はおもにスマトラやマレー半島を例に、東南アジアの農民が伝統的に外部世界に開かれた農業を営んできたと論じる。こうした田中のいう「農民農業」の特徴は、商品作物の柔軟な受容とともに、自給的生業への可逆性を常に残している点であろう。それを可能にする時間的・空間的な意味で多様性をもたせた生業形態をとってきたと言い換えることもできる。

タイ南部でのアブラヤシ栽培は、最初は企業が大規模プランテーションによって生産したものが農民に広がったという点では田中のいう「農民農業」と同様である。しかし、その生業空間は非常に均質的であり、不可逆的に見える。どうしてそうなったのだろうか。

二つ目は、農民たちの所得や生活水準が高いということである。調査地では、家電・自動車・携帯電話といったコモディティの普及はほぼ完了している。現在では、高等教育への進学率も高くなり、高学歴化の途上にある。日々の食物は、飲料水を含め、ほとんどを購入する。

ゴムとアブラヤシという2種類の作物がそれを支えるだけの収入をもたらしている。一定の経済成長を遂げたタイは「中進国」と呼ばれることもある〔末廣 2009〕。近年は、商品作物栽培によって農村でも中所得化が進んでいる〔Walker 2012〕。タイの農村のなかでも南部は、高等教育の普及やライフスタイルの都市化という面で他地域より進んでおり、都市中間層に近づきつつある。農村社会・生態環境が根本的に変わりつつある。

さらに注目すべきなのは、農作業に外部の労働者を雇用することが多いことである。特にアブラヤシ栽培において顕著であり、重労働で危険を伴う収穫作業は例外なく外部の労働者によって行われている。つまり、農園経営は自分で行いつつ、危険できつい作業をアウトソーシングする、いわばホワイトカラー農民が増えている。

こうした変化が、田中のいうような「農民農業」の前提を崩しているのかもしれない。

農民たちが当初から現在のような姿を目標にして農業経営形態を変えてきたわけではない。農地や林地、あるいは自然資源の利用については、これまで、システムとして捉えられることも多かった。確かに、物質循環や持続可能性を評価する際には、そうした分析が必要な場合もある。しかし、農民の目線から見れば、ある時点での土地利用に必ずしも首尾一貫した企図がある訳ではない。リチャーズ〔Richards 1993〕がいうように、農業は現在進行形のパフォーマンスである。例えば、新しい作物・品種・農法を一部、実験的に取り入れ、うまくいけばそれを広げてゆく〔Ramisch *et al.* 2006〕。「次にどうするか」がその場その場で判断され実行（パフォーマンス）され続ける。本稿で取り上げるタイ南部農村での生活世界の変化も、そうしたその場その場のパフォーマンスの帰結である。その経緯が具体的にどのようなものだったのか。以下では、こうしたホワイトカラー農民が出現する過程で、アブラヤシがどのような役割を果たしたのか、特に農民と自然との関わりの変化を軸に明らかにする。さらに、その将来を展望する。

なお、本稿で用いるデータは、主に2011年8月、2012年3月、2012年8月、2013年7月に、それぞれ、1週間程度の期間、調査村に滞在し、村人からの聞き取りによって得たものが中心である。

II タイのアブラヤシ栽培の概要

前述の通り、タイのパーム原油生産の世界シェアはインドネシア、マレーシアという二つの巨人から遠く離れた世界第3位となっている。世界的な生産増のトレンドに従う形でタイの生産量も増加し、3%のシェアを保っている。気温や降雨などの自然条件のため、タイでのアブラヤシ栽培はほぼ南部に限定されてきた。特に、クラビー、チュムポン、スラートタニーの3県が多く、この3県の国内シェアは70%近くに達する。その近隣のナコンシータマラー

ト、プラチュアップキリカン、トランといった県も重要な生産地である〔農業経済事務所 2011: 28〕。近年、マレーシア国境沿いの県や東部・中部、東北部の一部地域にも栽培が広がっている。

タイでアブラヤシ栽培が始まったのは1968年で、ソンクラーク県でモーム・チャオ・アマラサマンラック・キティヤコンによるものである〔Phaliphan 2000: 148–149〕。同年中にクラビー県プライプラー郡でチアン・ワニットも栽培を開始した。チアンのほうが事業としては成功し、タイで最大級のパーム油生産企業であるユニワニット社に成長した〔Anonymous 1983〕。それに続くかたちで、クラビー、チュムボン、スラートタニー県を中心に多くの会社がアブラヤシ農園や搾油工場を設立した。

アブラヤシは果実を収穫した後、24時間以内に搾油しなければ、油質が劣化するといわれている。そのため、通常、アブラヤシ園は搾油工場とセットでなければ開発できない。マレーシアやインドネシアでは、企業による大規模農園と搾油工場からなるプランテーションとしてのアブラヤシ生産が中心である。これに対し、タイでは、搾油工場とごくわずかな面積の直営農場（それすらない場合もある）を企業が建設すると、周辺地域の農民が自主的にアブラヤシの栽培を始めるというパターンで栽培が広がった。現在、アブラヤシの栽培面積の70%以上が自営小農民のものである〔Prakarn 2011〕。つまり、タイにおいては、アブラヤシは、大規模プランテーションによって外部から持ち込まれ、在来の社会との間で土地や自然環境の改変をめぐる紛争を起こすようなものではなかった。¹⁾むしろ、早い段階から、アブラヤシは在来の農村に浸透することで栽培を拡大してきた。他方で、アブラヤシにせよ、ゴムにせよ、プランテーションと同様な方法、つまり、基本的には、苗木業者や政府機関の指導に従った方法で栽培される。その結果、現在では、生態的には非常に均質な空間となっている。

タイでは、マレーシアやインドネシアのように政府が主導的にアブラヤシ農園開発を行ったり、強い規制で栽培をコントロールしたりはしていない。ただし、政府による振興策は1980年代から実施されてきた〔Rujira 2003: 7〕。第8次計画（2002～2006年）では、栽培面積を200万ライにする、アブラヤシ果房の生産性を年間1ライ（=1,600 m²）あたり2.5tまで引き上げる、という数値目標が設定された〔*ibid.*: 10〕。さらに、「アブラヤシ・パーム油開発計画」（2000～2006年）、「アブラヤシ・パーム油産業開発計画」（2008～2012年）と、アブラヤシに特化した開発計画が策定され、栽培面積拡大と生産性の向上が図られた〔農業経済事務所 2000; 2007〕。2008年には、官民の代表から構成される「国家アブラヤシ政策委員会」を首相府の下に設置し、官民間・省庁間を横断した政策調整の仕組みを整えている〔首相府規則 2008〕。「アブラヤシ・パーム油産業開発計画」では、生産性の向上として、年間1ライあたり3tから

1) プランテーションと周辺住民との紛争については、例えば、中島〔2011〕。

3.5t へ、搾油率を 17% から 18% へ、それぞれ引き上げること、栽培面積を毎年 50 万ライ、5 年で合計 250 万ライ拡大すること、古いアブラヤシの木の植え替えを、毎年 10 万ライ、5 年で合計 50 万ライ行うこと、が目標として設定された [農業経済事務所 2007]。こうした目標を達成するべく、さまざまな振興策が事業化され、農業協同組合省の地方の出先機関で実施されている。一方、マレーシアやインドネシアに比べ、原価が高いタイのパーム油産業（あるいは、アブラヤシ農民）を保護するため、パーム油の輸入は原則として禁止され、価格が下落すると政府による介入も行われてきた。このような、振興策と保護策を両輪として、アブラヤシ栽培が拡大してきたのである。

III 調査村の概観

本稿では、筆者が現地調査を行った、スラートタニー県チャイブリー郡サイトーン区サイガーム村、および、その周辺での事例を中心に議論を進める。その調査村を概観しておこう。

調査村が位置するのは、アブラヤシ生産の中心地であるスラートタニー県とクラビー県の県境近くである。一帯はなだらかな丘陵地帯である。村内を流れる川は北東に流れ、県都スラートタニーからシャム湾に注ぐターピー川の支流となっている。県境が分水嶺となり、県境を越えて隣接するクラビー県カオパノム郡からは川は南に向かって流れ、アンダマン海に注いでいる。しかし、分水嶺といっても目立った地形的な特徴があるわけではなく、普段から、村人たちは県境をまたいで相互に行き来をしている。この付近の村落は、基本的に道路に沿った列状村である。道路沿いに民家が点在し、その奥にはアブラヤシかゴムの農園が広がっている。なかには、道路から奥まった農園のなかに家を建てる人もいる。古い家屋のなかには、木造のものや、編竹で壁を作り草葺きの屋根のものも残っているが、多くはコンクリート造りの平戸間のものである。ほぼ全ての家には自動車とバイクがあり、電化製品も一通りそろっている。タイの農村としては裕福な暮らしぶりである。

2010 年の統計では、サイガーム村の人口は 114 世帯、482 人である [チャイブリー郡農業事務所 2010]。サイトーン区の村々はすべて第 1 村であるソーンプレーク村から枝分かれしてできた村である。住居や農地が断続的に連なり、村々の境界は、川などを除き、一見してわからない場合も多い。人々の行き来や血縁関係も区の村々の間では特に強く、村長同士が血縁の場合もある。もっとも、村人たちのなかにはクラビー県、ナコンシータマラート県、パッタラン県など近隣の県からの移入者やその子孫も多い。これら村々全体の歴史、つまり、第 1 村の歴史は少なくとも 100 年以上はあるというが、村人でもその詳細はわからない。

この地域の農業は、後述のように、かつては水田や焼畑を中心とした自給色の強いものだったが、現在では、サイガーム村の村人の農地 2,073 ライ (331.6 ha) の 70% がゴム園、30% がア

ブラヤシとなっている。²⁾ この割合は、チャイブリー郡全体でもおよそ当てはまる。相対的に高い土地にはゴムを植え、低くて湿り気の多い土地にはアブラヤシを植えることが多い。このほか、2,000 ライ (320 ha) の広さの企業のアブラヤシ園が村内にある。

IV 村での農業の変遷とアブラヤシ

1. 自給的農業の時代

この村で生まれ育ったA.I.氏によれば、1970年頃に自動車が行き可能な道路ができるまでは、徒歩か舟での往来だった。スラートタニー方面へは、郡役所のあるプラセーン（当時、プラセーン郡の一部だった）を経て鉄道駅のあるバーン・ソンまで、川を舟で下って行った。クラビー県側へは、徒歩によるしかなかったという。その頃の村の農業は、水田と焼畑が中心だった。焼畑では陸稲を主に栽培するとともに、野菜類も自給用に植えていた。加えて、焼畑でキャッサバを栽培し、それをえさにして養豚を行っていた。当時、栽培されていたキャッサバは、現在、タイ全国で工業用原材料として広く栽培されている苦味種ではなく、そのまま食用にすることができる甘味種だった。

S.C.氏（現村長）は、サイトーン区に隣接するクラビー県側の村の出身だが、そこでも農業の様子は同じだったという。彼が10歳くらいの頃（1960年代末ごろ）の記憶によれば、父親が村で豚の仲買人をしており、村人から買った豚をクラビー県のヌアクロン郡にある豚市場まで徒歩で売りに行っていたという。それが村人にとってのわずかな現金収入源だった。ただし、現在とは違い、食料はほぼ自給していたので、日常生活で現金が必要になることは少なかったという。

また、S.S.氏（前村長）によれば、米は水田と焼畑で自給できていた。焼畑はまだ広げる余地がたくさんあったから、勤勉な人は豊かであり、怠けた人は貧しくなったという。魚は水田や小川で、主に仕掛けによって捕まえていた。また、イノシシや野鶏を狩猟に行くことが月に2～3回程度あり、一人の場合も、グループでの場合もあったという。村人の中には、トラなどを、ヌアクロン郡から来る商人に売っていたという人もいる。ただし、狩猟は村人のなかでもやる人とそうでない人がいた。その他、バック・ワーン (*Melientha suavis* Pierre) などの山菜やタケノコ、キノコなども自然のものを採って食べることができた。自然の魚や野菜・キノコ・タケノコなどは、誰の土地、誰の水田であっても採ることが許されていたという。

2) 2011年9月時点での農業・協同組合省の農民データベースによる。チャイブリー郡農業事務所での聞き取りの際に示された。

2. ゴム栽培の広がり

サイガーム村にゴムが入ってきたのがいつなのかはよくわからない。この村で育った年長者たちは「ずっと昔からあった」という。ただし、最初は、現在のようなゴム園ではなく、自然の森の中に古い品種のゴムの種子を植えたもので、手入れも全くしない粗放なものだった。天然の樹木とゴムの木が混在するこうしたゴム園を、村人たちは「ゴム園」(*suan yang*)ではなく「ゴムの森」(*pa yang*)と呼んでいたという。村内では、ごく数世帯の村人がこの「ゴムの森」を持っていたが、大した収入にもならないので、関心を示す人はほとんどいなかった。

現在のような、改良品種が等間隔に植えられ、草刈りなど手入れもされたゴム園としては、聞き取りでは、最も早いもので1973年の事例が確認できた。村人の多くがこのような「近代的」なゴム栽培を始めたのは1980年代以降である。元々、現金収入が少なかったので、農業銀行から借金をしたり、あるいは、できる範囲で毎年、少しずつ苗木を購入したりして植えていった。近くのゴム園から拾ってきた種子で苗木を自作したという人もいる。多くのゴム園は焼畑の休閑林を開墾して造成されたが、開墾作業も親族間での結い(*long khaek*)で行われた。

休閑林の開墾による新たなゴム園の造成は1990年代になっても続き、聞き取りの範囲では2004年の事例が最後であった。その頃に休閑林が全くなり飽和状態に至ったと考えられる。その後は、古いゴム園の植え替えが行われるだけで、新規のゴム園は開かれていない。ゴム園の植え替えには、「ゴム園基金」(*kong thun songkhro kan tham suan yang*)による資金援助が受けられる。よって、現在では、概ね25年を目途に、古いゴム園は順次、植え替えられている。

3. アブラヤシ栽培の広がり

村でアブラヤシ栽培が始まったのは、近代的ゴム園より少し遅く、1979年である。マレーシア人とタイ人の合弁会社が、村人の休閑林を買い集め、アブラヤシ園を開いたのである。面積は2,000ライである。このときに、数人の村人は会社に土地を売らず、自らアブラヤシを植えた。S.S.氏はこの中の一人である。彼は、その頃、チアン・ワニット社(現ユニワニット社)のあるクラービー県プライプラー郡に滞在する機会があり、同社の工場をじっと観察していた。すると、積み上げられたアブラヤシの果実が一晩を過ぎても元の通りにあるのを発見した。村では、合弁会社が、アブラヤシの果実は収穫後24時間以内に工場で搾油する必要がある、村人たちが自ら栽培して工場に販売することはできないといって土地を買い集めていた。S.S.氏は、チアン・ワニット社の工場を見て、この合弁会社の話は嘘だと判断し、自分でアブラヤシを栽培することを決断したという。

当時、村の近くには搾油工場がなく、合弁会社も遠くトラン県の工場に売っていたという。輸送距離を考えると、収穫後24時間以内に搾油できていたか疑わしい。S.S.氏ら、最初にア

ブラヤシ栽培を始めた数人は、自ら収穫し、チアン・ワニット社まで運んで売るつもりだった。ところが、1982年には、チャイブリー郡の隣のプラセーン郡に搾油工場ができ、「ランテー」(*lanthe*)と呼ばれるアブラヤシの仲買も営業を始めた。よって、最初に植えた村人たちは、結果的に、このランテーに売ることができ、また、収穫作業を依頼することもできた。このランテーの開業をきっかけにアブラヤシ栽培を始めた村人もいたが、まだ、今ほど多数ではなかった。同じ1982年には、隣村の領域に、10,000 ライの国有林を借地して、チャイブリー・パーム・トーン社がアブラヤシ園を開いている。この中には、村人が「チャップチョーン」(*chap chong*)という慣習的な占有を行っていた土地が含まれたため、反対した人もいたが、かなわなかったという。

村でアブラヤシ園の造成が最も盛んに行われたのは1990年代である。村の内外で会社の大きなアブラヤシ園ができ、また、村人のアブラヤシ園も徐々に増えた。1980年代までのアブラヤシ園は、森林（多くは焼畑休閑林）を開墾したものだったが、1990年代になると、休耕田からの転換が増える。村人たちの説明によれば、アブラヤシ自身が大量の水分を吸い上げるのに加え、森林がなくなったことで、地下水位が下がり、水田（天水田）に水がたまらなくなってきた。ゴムやアブラヤシによる収入も増え、米を購入することも容易になった。このため、水田が耕作放棄されるようになった。特に、1992年には天候不順もあって、かつてない干害となり、村の水田は種籾も残らぬほどの被害を受けた。これを契機に、続々と、水田がアブラヤシ園へ転換されたのだという。この間、1994年から1995年にかけて、政府による放棄田のアブラヤシ園への転換を支援するプロジェクトも行われた。村人の中には、このプロジェクトによる支援を受けてアブラヤシ園を開いた人もいる。

1990年代以降、水田からの転換とともに、休閑林を開墾してのアブラヤシ園造成も引き続き行われた。2012年に村内で行った質問紙調査³⁾では、回答を得られた30世帯が調査時に村内に所有していたアブラヤシ園が16カ所あった。それらが植栽された年ごとに面積を合計すると、1994年に10ライ(1.6ha)、1997年に61ライ(9.76ha)、1998年に14ライ(2.24ha)、2002年に80ライ(12.8ha)、2006年に6ライ(0.96ha)だった。アブラヤシ園にする前の土地利用については不明な回答もあった。これに聞き取りも加えた範囲では、水田からの転換は2002年、休閑林の開墾によるものは2004年の事例が、それぞれ最後となっている。こうして、村には水田も森林もなくなり、ごく僅かに果樹園などがある以外には、アブラヤシとゴムに埋め尽くされることになったのである。

3) 全世帯を対象に行ったが、村全体の100世帯中、30世帯しか回答が得られなかった。

4. 生活世界の生態的変化

このように、水田と焼畑を中心にした自給色の強い農業から、ゴムとアブラヤシという永年性換金作物栽培に完全に置き換わった。それに伴い、現在では、米を含めてほぼ何もかも、飲料水まで配達業者から購入するようになった。家電や自動車も普及した。多くの村人は、近隣の村や郡役所前の市場、場合によってはクラビー郊外の大型ショッピングモールに車で日常的に買い物に出かける。ゴムもアブラヤシも、価格の変動はあるものの、アジア経済危機以降は、2011年まで上昇を続けた。村人の所得は明らかではないが、2012年頃に村人がよく言っていたのは、若者が親から農地を分けてもらってゴムやアブラヤシを栽培すれば、月収3万バーツから4万バーツ程度は稼げるということだった。かなり価格が下がった2013年7月でも、食料ははじめ生活に必要なものを購入することに困難な様子は見られなかった。

村人の一人は、貨幣経済の浸透という意味での変化が起き始めたのは、1980年代初め頃だったという。ほかに、聞き取りの範囲では、1970年代くらいまでに村に婚入してきた男性は、昔（来た当初）は、日常的に魚を捕まえて食べていた、と言うのに対し、1980年代以降にきた人は、そういう経験がないという人が多かった。よってこの頃を境に、日常の食物を購入する割合が増えていったと考えられる。これは、ちょうど、ゴム栽培が広がった時期と一致する。ゴム栽培による現金収入が貨幣経済の浸透を支えたとともに、1990年代以降のアブラヤシ栽培のための資金を準備することにもなった。

こうした生活スタイルの変化とともに、周囲の自然環境も劇的に変化した。森がなくなったので、野生動物や山菜は激減した。現在でも川沿いではタケノコがとれ、一部の種類のキノコは、アブラヤシ園でも生え、今でも食べられている。しかし、食生活全体に占める割合は僅かである。また、水田がなくなり、地下水位が下がったことで川の水量も減った。川の魚も減り、日常的に魚を捕って食べる人はいなくなった。木材を切り出すことのできる森林などないので、村内の家屋は、数軒の古いものを別にすればブロックとセメントで建てたものばかりである。一連の変化のなかで、地域の生態環境を根底から変えたのは、アブラヤシ栽培による水文環境の変化だった。水田からアブラヤシ園への転換もその過程のなかで起こったことだった。昔は2mの深さだった地下水位が、現在では20mになったという。日常の食料から飲料水に至るまで外部に依存するという生活世界はこのようにして作られたのである。村の人々を中心とした生態的リンクを根本から、不可逆的に変えたという意味では、ゴムよりアブラヤシによるインパクトが大きかったと言える。1980年代には、村人のアブラヤシ園はまだわずかで、面積比としては、企業のアブラヤシ園が大きな割合を占めていたことを考えると、こうした変化を最初に方向付けたのは、この企業のアブラヤシ園だったとも言える。ただ、この企業を非難する人は村の中にはいなかった。

こうした生活環境の変化を、村人たちはどう考えているのだろうか。聞き取りをした中では、

サイガム村生まれか、他村より婚入したかを問わず、40歳（2012年から2013年調査当時）くらいを境に態度の違いが見られた。40代以上の場合、一様に昔の自給的な暮らしを懐かしむ。収入はなかったが、生活にお金がかからず、また、借金などもなかったので、現在よりも心地よく暮らすことができたというのである。洪水のような自然災害や、農薬のような化学物質による汚染がなかったことを挙げる人もいる。

現在のように、お金が必要な生活になってしまうと、何かのアクシデントで収入が絶たれば生きてゆけなくなる。自給的な生活では、そうした心配をする必要はない。しかし、同時に、彼らも現在の生活の利便性を軽視しているわけではない。道路ができ、病院もできた。車があればどこにでもすぐにゆくことができる。携帯電話で誰とでも連絡を取ることができる。それを支えるのに十分な収入がある。農作業の面でも、焼畑耕作では、日中、長時間の作業が重労働だったが、ゴムのタッピングは夜間なので涼しくて楽だという人が多い。アブラヤシに至っては、後述のように、普段の収穫作業は完全にランナーの労働者任せである。年長の村人たちの多くは、現在の利便性と昔の暮らしの心地よさ、ともに違った良さがあるという。しかし、同時に、みな、昔に戻ることはできないと強調する。

これに対して、30代より若い世代は、昔の自給的な暮らしを懐かしむようなことは全くなく、現在の便利で豊かな暮らしが快適であると考えている。前述のように、彼らは自然に依存した生活をあまり経験しておらず、それがどのようなものか、身体的感覚が乏しいのであろう。

V ホワイトカラー農民とアブラヤシ

1. アブラヤシ農園のつくりかた

第I章でも触れたが、この地域のアブラヤシ栽培の特徴の一つは、ほとんどの人が果房の収穫作業をアウトソースすること、また、そのための仕組みが整備されていることである。つまり、農民がホワイトカラー化している。この章ではその実態を検討する。その前に、まず、アブラヤシ栽培とはどのように行うものなのかを見ておこう。

最初に農園を開くには、まず、ショベルカーで開墾、地ならしをし、トラックが入れる道を農園内につける。1980年代頃にはまだショベルカーがなく、トラクターで行っていた。水田からアブラヤシ園に転換する場合、すでに開けた土地であれば開墾や地ならしは必要なく、道だけをつければよい。その後、大型のトラクターで2回耕起する。1回目は耕起するためのディスクが3つのもので粗めに起こし、2回目はディスクが7つのものでより細かく耕起する。これら、ショベルカーやトラクターは、運転手ごと雇ってくる。整地をした後に、苗木を植える。普通は9m×9mの等間隔に植える。現在のアブラヤシ栽培では、通常、Dura種とPisifera種の交配第一世代（F1）であるTenera種の苗木を植える。最近では、Tenera種をベースにした

改良品種も多く開発されている。Tenera種の種子・苗木は、F1世代に限られるため、植栽するには必ず購入する必要がある。1990年代までは、自分で近くのアブラヤシ園から落ち生えを拾ってきて植える人もいた。また、そうやって作られた苗を Tenera種と偽って販売する業者から、だまされて偽の苗木を買ってしまった人もいる。正しく交配された Tenera種でないと収穫量が低くなるので、当時は南部全体で大きな問題になった [Rujira 2003]。現在では、農業事務所による広報活動もあり、偽苗の問題はなくなったという。⁴⁾

苗木を植えた後は、施肥、除草、収穫が作業の中心となる。苗木を植えてから、3年から4年で実をつけるようになる。さらに2年くらいで、幹がある程度高くなると、下の方の葉を葉柄の根本で切りそろえる「テーンターン」(*teng thang*)という作業を行う。そこまで成長すると、成木として果実を収穫できるようになる。テーンターンをするようになってからは、肥料は年3回、1本の木につき、窒素・リン酸・カリウムの含有比率(%)が0-0-60のものを1kg, 21-0-0を1kg, 18-46-0を0.5kg, 46-0-0を0.5kgずつ入れる。ただし、現在では、これをあらかじめ配合したものが売られており、それを用いる人も多い。また、アブラヤシ価格が低い時期など、時々の経済的な事情で、施肥の回数を減らす人もいる。除草は年1回で、草刈り機で刈る。除草剤を使うと根を傷めると、絞った油に農薬の成分が混じってしまうので普通は使わない。ただし、除草の手間を省くために、数年に一度くらいは使うという人もいる。除草剤をまくと2~3年は全く雑草が生えないという。

収穫作業は、熟した果房の付け根から切って地面に落とす。大きいものでは果房ひとつが50kgにもなる。また、アブラヤシの木が生長してくると樹高が10mを超える。果房の収穫は、10m以上あるタケの柄の先に鎌のような刃物を取り付けたものを巧みに操作して行いが、50kg近い果房の付け根を長くて操作の難しい道具で切り落とすのは重労働である。そのため、後述のように、農園主自ら収穫作業を行うことはない。古い葉を切るテーンターンも収穫時に行う。

2. ランターというシステム

現在、アブラヤシ農園を所有している村人のほとんどは、自分で収穫作業をしたことがない。前述のように、村で初めてアブラヤシを植えた一人である前村長のS.S.氏は、植えた時には自分で収穫して売りに行くつもりだったが、結局、やらずに済んだ。なぜなら、ちょうど収穫できるようになった頃に仲買人である「ランター」が開業したからである。現在は、隣のソーンプレーク村に2軒、ランターが開業しておりサイガム村でも多くの人がどちらかに収穫を依頼し果房を売っている。2010年の時点で、スラートタニー県内に400以上あるとされる[ス

4) チャイブリー郡農業事務所、および、サイガム村での聞き取りによる。

ラートタニー県事務所 2010: 36]。以下、特記なき限り、うち1軒での聞き取りによる。

ランテアーは、基本的には仲買人で、農民たちのアブラヤシの果房を買い受け、まとめて搾油工場に売る。これに加えて、ランテアーは労働者を抱えていて、収穫やそのほかの作業を請け負わせる。特に、収穫作業は、サイガーム村では全員がランテアーの労働者に委託している。近隣の村を含めても、経営面積が非常に大きく、自前で多数の労働者を常時雇用している人を除き、ほとんどの人がランテアーに委託している。ランテアーの労働者が収穫した果房は自動的にそのランテアーに売られる。多くの農園主はランテアーの労働者に継続的に収穫を委託する。ランテアーでは、ピックアップトラック1台ごとに運転手と収穫作業員数名のチームが生まれ、それぞれに担当の農園が割り振られている。各収穫チームは、担当の農園を、ちょうど、熟した果房を収穫できるよう18日から20日の間隔で回るようなローテーションを組む。農園主は、その都度、収穫の依頼をする必要はない。一度、ローテーションに入れば、自動的に収穫される。農園主は、アブラヤシ果房の代金から収穫・運搬の労賃を差し引いたものをランテアーから受け取るだけでよい。

ランテアーの労働者は、ミャンマーかタイ東北部からの出稼ぎである。ピックアップトラックは、持ち主が自ら運搬をさせてくれとランテアーのところにくる。このトラックの持ち主（すべてタイ東北部出身）は、収穫チームのリーダーとなり、スケジュールを組み立て、自ら運転をして農園を回るが収穫作業は行わない。農園主から払われる運搬賃（相場は1トンあたり200バーツ）は全額、トラックの持ち主の取り分となる。これ以外に、ランテアーからガソリン代の補助をもらう。一方、収穫賃（相場は1トンあたり350バーツ）は、リーダー以外の収穫作業に当たる全員で平等に分配する。アブラヤシ果房の買い取り価格と工場への販売価格の差額だけがランテアーの利益となる。

サイガーム村の村長S.C.氏も、以前、ランテアーを営んでいた。彼が言うには、工場の買い取り価格は、果房よりも、房からこぼれ落ちた果実のほうが高い。しかし、農民からは同じ価格で買い取る。その差額分もランテアーの収益になるという。チャイブリー郡農業事務所職員のアティチャイ氏によれば、ランテアーは秤をごまかしたり、買い取った果房に散水し重量を増やして工場に売るなどして利益を上げているということだった。ただし、村で秤のことを聞くと、ある人は「(少なくとも)今はそんなことはない」と言った。

ランテアーが労働者用の住居なども準備し収穫チームをそろえているのは、農園主に対するサービスである。収穫だけでなく、施肥や草刈りも一部、あるいは全部、労働者を雇用している村人も少なくない。これらの作業には、村内に居住し、普段は主にゴム採取に従事する労働者を雇用することもあるし、ランテアーの労働者を雇用することもある。農園主は、ランテアーの提供するサービスを利用することで、ほとんど何もしなくても、収入が得られるようになっているのである。

3. 労働者への依存

アブラヤシの収穫作業は100%ランテールの労働者によって行われている。施肥・除草や切り落とした茎葉を集める作業は自分で行う人が多いが、経営面積が大きい場合に人手が足りない分、雇う人、あるいは、すべて労働者に任せる人もいる。これらの作業や収穫の際にランテールの労働者の作業を確認しにゆくなど、アブラヤシ園に行くのは月に1回くらいという人が多い。葉や果実の状態を確認するため、毎月2回程度、アブラヤシ農園に行くという人がいたが、例外的に熱心な例である。軽作業や経営判断を行い、重労働は一切、委託することで一定のお金が入ってくるような仕組みになっている。ある村人は、最低限、施肥や草刈りの段取り、つまり肥料の購入や草刈り機の手配をし、後の作業は一切、ランテールの労働者に任せる場合、果房の重量1kgあたり3.5パーツ程度以上であれば利益が出ると推計した（2012年時点）。これまでに、例えば1パーツを割り込んだ2001年のように、施肥ができないほど価格が下がったこともあった。最近では、2011年をピークに価格が下落し、村人が販売する価格は1kgあたり3パーツを下回る時期もあった。しかし、村人はみな、一貫して、収穫を全てランテールの労働者に委託している。自分ではできないのである。

ゴム栽培でも労働者の雇用は広く行われている。ただし、ランテールによる統合的なサービスとは違い、仲買人による労働者派遣のサービスはない。村人自身が住居を用意し、ミャンマー人の労働者を探してくるか（ブローカーに依頼することはできる）、土地なしの村人を雇用する。アブラヤシでは収穫作業の労賃が定額なのに対して、ゴムでは分益を行う。タッピング、収穫、板ゴムへの加工、までを行って、土地の条件によって販売額の40%から50%を労働者が受け取る。通常、施肥は年に2回、草刈りは1回行うが、この作業が分益に含まれる場合も、別に労賃を払う場合もある。また、肥料代は農園主が負担する場合も、農園主と労働者が折半する場合もある。こうした諸条件は双方の話し合いによる。通常、長期間、契約関係が続く。2011年には、村では、3人の村人が、ミャンマー人労働者を住まわせていたが、うち、1人が雇っていた家族は、ゴム園の植え替えを契機に2013年に帰国した。ミャンマー人労働者は大家族で、それぞれ子どもを含めると10人以上いる。彼らは、住居を提供している主たる雇用主との契約を満たした上で、ほかの村人とも請負の契約をする。家族内で割り振りし、何軒かの世帯の作業を請け負うことで、家族で毎月3万から4万パーツを稼ぐという。つまり、個別に請け負ってくれる労働者と交渉して契約する必要はあるものの、ゴムでもアブラヤシ同様に、全ての農作業を人任せにすることが可能だ。ただし、現状では、ゴム栽培に関する作業は自分で行う人が多い。前述の質問紙調査では、回答を得られた30世帯中26世帯がゴム栽培を行い、内14世帯はタッピング・収穫など全ての作業を家内労働で行っていた。一方、タッピング・収穫を自分では一切、行わないと答えたのは2世帯、除草、施肥を含めた作業を一切、自分で行わないと答えた世帯はなかった。

村人たちはよく「(どちらも栽培できる土地なら) 所有する土地が広い場合はアブラヤシを栽培するのがよいが、狭い場合はゴムを植えたほうがよい」という。これは、アブラヤシのほうが規模の経済が働くという意味ではない。ゴムの場合は全て自力で作業することが可能だ。しかし、自家労働力で毎日のタッピングを行う面積は限られる。通常は10ライから15ライ程度だ。その範囲ならゴムを植えたほうがよく、それを超える分はアブラヤシ園にする。そうすれば、自分で労働者を調達する必要もなく、ラーンテーの労働者任せでやってゆける。逆に言えば、「ゴムは毎日、頑張ってタッピングをすれば収入を増やすことができるが、アブラヤシはどうしようもない」(S.C.氏談)。彼らにとって、現在の生業の基盤はゴムであり、余剰分がアブラヤシという位置づけなのである。

4. 若者世代の動向

このように、農民自身がきつい農作業を行わなくもよい状況が、ラーンテーの収穫チームやミャンマー人労働者によって、また、ゴムやアブラヤシの高価格によって実現した。これが若者世代の動向にも影響を与えていた。

村では、高等教育への進学が一般的になっている。前述の質問紙調査の30世帯の回答によれば、対象世帯構成員⁵⁾のうち、20代では15人中6人が短大／大学卒、4人が中学／高校卒、5人が小学校卒だった。30代では、21人中、それぞれ、5人、6人、9人だった(残り1人が障害者で教育を受けてない)。40代では、10人中、それぞれ、0人、4人、6人で、50代以上は全て小学校卒業以下だった。また、19歳以下では1人を除く全員が就学中だった。このように、30代から下では、急激に短大／大学卒が増えていることがわかる。彼らが大学・短大に進学し始めたのは1991年以降である。ゴム栽培の普及が一段落し、アブラヤシ栽培が広がりつつあった時期である。さらに高等教育進学率が高くなった20代の場合、大学・短大に進学し始めたのは2002年以降であり、ゴム、アブラヤシの価格が上昇し始めた時期である。つまり、ゴム、アブラヤシによる現金収入増が高学歴化の直接的な原動力であった。

では、彼らは大学・短大卒業後、どうするのか。大学・短大を卒業した後、学歴を活かして都市で就労する人は、当然、多い。例えば、S.I.氏は、アブラヤシ園22ライ(3.52ha)、ゴム園47ライ(7.52ha)を営む。平均的な農地所有が世帯あたり15ライから20ライ程度なので、比較的、裕福だと言える。子どもは女3人で、順に、1980年生、1987年生、1992年生。2012年当時、長女は隣郡で教員をしており、自分の住居と実家とを行き来していた。次女はスラートタニーで薬剤師をしていた。三女は大学在学中だった。ゴム採取はしんどい、あるいは、学校を出たからには、それを使って働かないと意味がないということで、長女、次女とも、農園

5) 戸籍(thabian ban)ベースなので、未婚の子は同居していなくても含まれる。

を継ぐ様子はないという。

S.C.氏も、アブラヤシ園 21 ライ (3.36 ha)、ゴム園 32 ライ (5.12 ha) を有する。長男 (1981 年生) は、短大で韓国語を学び、プーケットで観光ガイドとして働いている。長女 (1984 年生) は、大学卒業後、プーケットのホテルで勤務していた。長男 Y 氏は、「(自分たち) 若い人たちは大抵、大学を出て、村には戻ってこない。とりあえず働いて、30 歳とか 40 歳になったら戻ってくるかもしれない」という。彼自身、農園のやり方も知らず、家にいても寝ているだけだから遠慮もするし外で働いているのだと語った。

このように大学を出たからには、それを活かして都市で働き、社会経済的上昇を図ろうとするのは自然な成り行きである。しかし、実際には、高等教育まで進学しながら、村で農業に従事する人も少なくない。A.I. 氏の娘 (23 歳・既婚) と夫 (25 歳) はともに大学卒だが、A.I. 氏らと同居し、農業に従事している。夫が卒業後、わずかな期間でも都市で就労していたのかは不明だが、娘は卒業後、すぐに結婚し農業に従事している。しかし、話を聞いていると、大学卒業後、一度は何らか会社などに就職した後、辞めて帰ってきた人の方が多いようだ。例えば、以前、タムボン自治体事務所に勤務していた男性 (30 歳・大学卒) は、仕事がつまらないし、定時で働くのが辛いということが理由で辞めて村で農園をやっている。K.B. 氏 (32 歳・専門学校卒) は、3, 4 年、会社で働いた経験があるが辞めて農園をやっている。農園のほうが収入がよく、また、自由な時間も多からだという。

2012 年当時、アブラヤシやゴムの価格は絶頂期からは下がってきていた。それでも、親の土地を分けてもらって農業をやれば毎月、3 万バーツくらいの収入になるということだった。だから、大学を卒業後、企業などで安定的に雇用されることが、経済的な面では魅力に映らないのである。前提として、彼らの両親が、10 ライから 20 ライ程度を彼らに分配できるだけである。前提として、彼らの両親が、10 ライから 20 ライ程度を彼らに分配できるだけである。その上で、村に戻って農園をやるというオプションは常に潜在的に存在している。Y 氏がいのように、30 歳、40 歳になったら、あるいは、定年後に村に戻るということもあり得る。年老いた後、あるいは、村で農業以外の商売などを主な仕事にする場合に、収入は少なくなるが、ゴムのタッピング・収穫なども全て、労働者を雇うことができる。「ホワイトカラー農業」が成り立つということは、彼らが村に戻って農園をやるというオプションの重要な要素なのである。

VI 揺り戻しの動き

1. 行政による振興策

このように、資本主義的で画一化された農業のあり方を見直す動きも見られる。意外なことに、政府の政策の中にもそうした動きが見て取れる。例えば、チャイブリー郡では、郡農業事

務所と各タムボン自治体との協議により「チャイブリー郡農業開発計画」が策定・実施されている。2010～2012年の計画では、プロジェクト予算の66%はアブラヤシ関係のものである。古い木の植え替えへの補助金が大きな部分を占めるが、そのほかに、有機農業や複合農業を促進するものが含まれている。これは、ドロマイトと有機肥料を混合する施肥法の研修と試験区画への補助金である。アブラヤシには特化していないものの、複合農業や有機肥料の製造・利用促進を図るプロジェクトは他にもある。こうした政策は、肥料購入のためのコストの削減による生産効率の向上を狙うという趣旨に加え、国王が唱える「充足経済」⁶⁾を反映し、農業や生活全般での貨幣経済への依存度を下げることによって生活基盤を安定させるという側面もある[チャイブリー郡農業事務所 2010]。

このほかに、アブラヤシ栽培農民グループのファシリテーションも行われている。農民グループが搾油工場と直接、交渉し、搾油率が上がるよう果房の品質向上をし、未熟果房が混入しないよう選別を強化する、といった条件の見返りに買い取り価格を上乗せするような合意を行う。そうすることで、農民に対し品質改善へのインセンティブを与える。ひいては、産業全体の生産性向上につながるということである。これは、換言すれば、ランター排除策である。農民から見れば便利なサービスを提供してくれるランターだが、実は、未熟な果房を混ぜて売ったり、搾油工場に売る前に果房に水をかけて重量を増やしたり、と、品質面での障害と見なされている。現在、搾油工場の乱立でアブラヤシ果房の売り手市場なので成り立っているものの、産業全体の生産性向上のためには、排除されるべき存在なのである。⁷⁾同時に、ランターに任せきりにする農民の態度も問題視されている。郡レベルでの農民グループの会合（各区の代表が集まった）で、メンバーの一人のL氏（彼は当時、「スラートタニー県アブラヤシ・パーム油協会」の会長だった）はこう言った。「農園を毎日見に行くようにしなければならぬ。アブラヤシの木、一本一本をよく手入れをしないと損をする。我々は農民なんだから」。農民のメンタリティとして、ホワイトカラーではいけない、というのである。

しかし、こうした政策の波及効果は少ない。複合農業や有機農業に関心を示す農民はごく僅かだ。値段が下がってしまったが、ランターへの依存も揺るぎない。ゴム・アブラヤシともに価格が下がってきた2013年でも、「価格が下がっても、まだ、切り詰めれば生活をしてゆける」という人ばかりで、品質向上で増収を図ることを考えている人はサイガム村では見られなかった。

6) 「充足経済」とは、国王が提唱した考え方で、まず、生活の基盤を（自給などの方法で）充足させてから、段階的に経済を発展させてゆくべきだというものである[チャイバタナー財団HP]。同HPでは、この考え方は、1970年代以降の王室主導の開発プロジェクトの中にも活かされているとしているが、実際には、筆者の経験では、世間に広まり各種プロジェクトの冠とされるようになったのは1997年の経済危機以降である。

7) スラートタニー県の開発計画では、ランターがアブラヤシ産業の最大の問題としている[スラートタニー県事務所 2010: 36]。

2. 農民による実践

ごくわずかだが、農民による複合農業・有機農業の実践例も見られる。以下、「充足経済」の成功例と自他ともに認める2つの例を示す。ただし、ともにサイガーム村ではなく、チャイブリー郡内の他区での例である。

L氏：アブラヤシを中心にした「充足経済」の実践例

一つ目は、先に登場したスラートタニー県アブラヤシ・パーム油協会会長を務めていたL氏である。彼は、県外のものも含めてアブラヤシ園10カ所計230ライ、ゴム園2カ所計90ライを所有しており、個人の経営としては大規模である。しかし、元々は、父から受け継いだ60ライの土地しかなかったところから、少しずつ土地を買い集め、広げてきた。この農園内に、「充足経済」に基づいた区画を設けている。アブラヤシを中心としながら、水田をはじめ、各種の野菜や果樹を栽培し、養魚池もあり、食料の自給を図っている。これに加えて、搾油工場から絞るかすの果房をもらい受け、豚舎の床に敷き詰めることで自然に豚の糞と混ざるようにし、肥料を造っている。この肥料を自らのアブラヤシ園に投入しているだけでなく、周辺の農民に販売もしている。

L氏は、こうした複合農業の環に換金作物のアブラヤシも含めることでコストの削減を図るだけでなく、農園内の微細な土地の条件の違いや、一本一本のアブラヤシの状態をチェックして、施肥のタイミングや量を調節している。そうすることで、例えば、他人からすでに収穫可能な状態で購入したアブラヤシ園で、元の持ち主の頃より遙かに多い収穫量を実現している。アブラヤシは彼らにとって、米などとは違って全く新しい作物だった。しかし、その性質を各種研修や経験から学習し、伝統的な知恵も交えてさまざまな栽培の技法を実践し、成果を上げてきたのだという。先の農民グループの会合での彼の発言の裏にはそうした実績がある。

C氏：自給的生活への回帰を目指す

もう一つの例は、サイガーム村の隣村のC氏である。彼は、1970年代後半以来、ゴム園、アブラヤシ園を営んでいた。これに加えて、12ライの土地で2007年から、「充足経済」を実践している。養魚池で魚やスッポンなどを飼っている。木材用、果樹、タケ、薬草、など様々な種類の樹木を植え、野菜やハーブや唐辛子も栽培している。自然の小川に形状を似せて池を掘り、水辺にシダなどを植えている。2012年3月の時点では、水田はなく米は購入しているが、翌年には陸稲を植える予定だと言っていた。また、牧草も栽培し、牛を3頭飼育している。牛糞から肥料を造り、12ライ全部に加えて、ゴム園とアブラヤシ園にも一部、使っている。既存のゴム園やアブラヤシ園についても、アブラヤシよりゴムのほうが採算がよい、肥料代を考えると無施肥のほうが純益が大きい、などコストの計算を細かく行い、経営判断を行ってきた。

ただし、ゴム園やアブラヤシ園はすでに子どもに譲ってしまっており、C氏自身は「充足経済」だけで生活している。

C氏は、こういう試みを始めて1年で米以外の食物は自給できるようになったという。現在では、妻がハーブをもとに造った調味料や有機野菜を販売している。このほか、木酢液をつくり、防虫剤などに用いたり、有機物を容器で発酵させガスをつくり台所で用いたり、研修で学んださまざまな知識を実践している。彼は、自らの実践を「(現代の資本主義に毒された生活から)60年前に戻ろうとしている」のだという。

この二人に共通するのは、かつて、資本主義に傾斜し、何らかの挫折を経験していることである。先のL氏は、かつて、ランターを営んでいたことがある。ランター経営から大きな収入はあったものの、部下を雇いトラックを夜間走らせて搾油工場まで売りに行く、そのトラックが事故にあわないだろうかなどと心配で、睡眠もままならなかったのも、ランターは廃業した。L氏は、換金作物のアブラヤシを大規模に栽培している点ではまだ、資本主義から完全に離れた訳ではない。企業経営・投資という部分で撤退したという意味である。しかし、農業だけなら、自分が努力しただけ報いがあり、余計な心配をすることがなく精神的によいというのだ。

C氏は、2000年頃、37万バーツの借金をしてみかん園を開いた。当時、みかん栽培がブームになっていたところである。ところが6年間で35万バーツしか売れず、破産しそうになった。そのトラブルの余波で家族の問題も起きたという。そこで、みかん園を放棄し、現在の「充足経済」の実践を始めたのだという。彼は、自分以外でも、「充足経済」の実践をしている人はみな、資本主義による人生の危機を経験しているという。

二人の農業の実践は、食物や生活に必要な物資の自給をどこまで追求するかという点で異なるものの、さまざまな工夫によって資本主義的農業のリスクを下げ、生活を安定させようとしている点で一致する。他方、二人のように挫折の経験がない多くの人々は、現状のままやってゆけるに違いないと考えるのである。

3. 人々の意識の変化の萌芽

前項で紹介した2名のような本格的な有機・複合農業の実践は、政府には高く評価され、両方とも「充足経済」の学習センターに指定されている。L氏はさらに、「優良農民」(*kasetkon diden*)として表彰もされた。彼らの農園にはタイ南部全域から見学者が訪れる。しかし、彼らのような実践は、ほとんど広がりを見ていない。C氏などは、今でも、村の中では変人扱いされているという。

それでも、サイガム村のなかでも、僅かながら、変化の萌芽が見られる。例えば、P氏は、

村内外にゴム園やアブラヤシ園を持っているが、有機・複合農業をやってみたくかねがね思っていた。しかし、有機肥料を混ぜようとはしても、彼自身は家畜を飼育しておらず、糞を手に入れるのが難しいので、2～3年に1回くらいしか入れられなかった。村で有機・複合農業に関心を持っているのは、彼以外には前村長S.S.氏だけなので、よくS.S.氏を訪れて有機・複合農業の話をしているという。なお、S.S.氏は、自らも稲作を行っており、村内で唯一、小さな精米所を所有している。

そのほか、住居の周りに野菜やハーブなどを植えている人や、農園内に養魚池をつくり魚を養殖している人も少ないがらいる。また、ゴムの植え替えを行った際に、苗木が成長するまでの数年間、陸稲を植える人がいる。これはここ3年くらいに復活したという。近年の物価の上昇を受け生活費を節約する、あるいは、「充足経済」のように生活基盤を安定させるためだと説明する人もいるが、農薬や防腐剤など食の安全に対する危険を理由に挙げる人もいる。

このように、村人の中に、資本主義的な農園経営だけではなく、外部の社会経済の動きに左右されない生活基盤を整えておくほうがよいという意識も見え隠れする。前項の二つの事例のように知恵を絞り労力をかけ現状を大がかりに変えることはできなくても、身近にできることを少しでもやってみるという人が現れている。もちろん、物価は上がり作物の値段は下がっても、まだ何とか暮らしてゆけるので、このままでよいと思っている人も多い。ともかく、少し、揺り返しの動きが出てきたということは、村人たちがどのように自然と向き合おうとしているのかを考え、さらには、村の農業や社会の将来的な可能性を探る上で示唆的であろう。

VII 「ホワイトカラー」化した農業はどこに向かうのか

これまでにサイガム村周辺で起こった出来事の連鎖を整理してみよう。

1970年ごろ、村に道路が通じるまで、徒歩か船でしか通行できなかった。農業は水田と焼畑だった。焼畑では陸稲のほか、養豚のためのキャッサバを栽培していた。果樹や「伝統的」ゴムも少し栽培していた。焼畑の休閑林が広がり、そこではキノコ、タケノコやバック・ワーンなどの山菜もとれた。水田や川では魚も多くとれた。イノシシなど野生動物を狩猟する人もいた。1970年代初めから徐々に「近代的」ゴム栽培が始まる。当初は、改良品種の苗木を購入することが困難で、資金もなかった。1980年代になると本格的にゴム栽培が広がる。多くは焼畑休閑林からの転換だった。

アブラヤシ栽培は「近代的」ゴム栽培より少し遅く1970年代末に始まったが、1980年代には、企業による大面積のアブラヤシ農園が村内や隣村にできたものの、村人のアブラヤシ園は徐々にしか増えなかった。しかし、水を多く吸い上げるアブラヤシが増えたため、地下水の水位が低下した。天水田にあまり水が溜まらなくなり、川の水量も減少した。ゴムによる現金収入で

米が買えるようになったこともあり、1990年頃には放棄田が増えた。1992年には未曾有の干ばつに見舞われた。この後、政府の支援もあり、水田が急速にアブラヤシ園に転換された。

日常的には、ゴム園は、夜中にタッピングに行き、朝方に収穫にゆくだけの場所である。アブラヤシ園は、月に1回か2回、ラーンテーの労働者の収穫作業を確認するだけの場所である。収穫物は工場に販売され、自ら食べることはできない。村は、そうした空間で覆われるようになった。アブラヤシ、ゴムとも価格の浮き沈みがあったが、現金収入源として人々の消費生活や子弟の教育を支え続けた。

このように、道路などインフラの整備、アブラヤシの搾油工場やラーンテーの開業、ゴムやアブラヤシの価格の動き、政府の政策、といった村の外での出来事、それに呼応する人々の動き、それに対する生態環境の変化、が絡み合って現在の状況を作り出した。人々は、その時々によかれと思う選択をしてきた。

これまでの一連の変化をどう受け止め、次の行動をどうとるかは人により異なる。概ね、40代以上の人は、昔の経験を手がかりにした自然とのつながりが、まだ、記憶のなかに残っている。だから昔の生活のほうが精神的には心地よかったと懐かしむのである。L氏やC氏のように、本格的に「充足経済」に取り組む人はほとんどいない。しかし、少しでも身の回りに食べ物がある環境を作ろうとする人が村でも現れてきた。物価上昇やゴム・アブラヤシの価格下落もその一因だろうが、外部世界に左右されず、目に見える形で食物があることが安心なのだ。

これに対して、若い世代の多くは、自給的な生活の経験がない。たまに川で魚を採るという人もいるが、今のところ、基本的には、現金収入を基盤にした生活にあまり疑問を抱いてはいないようだ。大学・短大を卒業後、企業などに就職し、都市で生活する人も少なくない。そのなかには、老後は村に戻って農園を引き継いでもよいと考える人もいる。しかし、それは、ゴムもアブラヤシも農作業のほとんどを労働者に任せることが前提である。

このように、ゴム・アブラヤシ栽培の広がり、地域の生態環境から人々の暮らしを物理的のみならず、経験や認識の面でも引き離していった。また、この二つの作物の価格が都市中間層的なライフスタイル、高学歴化を支えることができるくらい高かった。その結果、アブラヤシやゴムは、田中のいう「農民農業」の基盤——自給的農業・生活への可逆性——となっていた人と自然の関係を文化的にも崩してしまったのである。

しかし、現在のような、中間層的、「ホワイトカラー」的な農民・農業が今後も維持できるとは限らない。世界的にアブラヤシの生産は現在も拡大を続けている。バイオディーゼルの利用の促進による需要増の可能性はあるものの、需給バランスが崩れて価格が暴落することも考えられる。また、ミャンマー、ラオス、タイ東北部など、これまで労働者の供給地だった国・地域で、ゴム栽培が拡大しつつある。これが労働力不足や労賃の上昇を招く可能性もある。現在のように、きつい作業を労働者に任せても十分に収入があるという図式が経済的に成り立

たなくなれば、例えば、都市での仕事をリタイアした後、農園を引き継ぐ人は減るだろう。現在、農業を営む人は、自分で収穫して売ようになるかもしれないし、農園を放棄するかもしれない。一部には、自給的農業への回帰が見られるかもしれない。ただし、森林や水田など、自給的生活を支える多様性のある生態環境を取り戻すことは難しい。ゴムとアブラヤシによる不可逆的な生態環境の改变の後、農民たちにとって残された選択の幅は、以前ほど多くはない。

参 照 文 献

- Anonymous. 1983. *Anusawari Chian Wanit* [チアン・ワニット記念碑]. (タイ語)
 チャイブリー郡農業事務所 (Samnak Ngan Kaset Amphoe Chaiburi). 2010. *Phaen phatana kan kaset amphoe chaiburi* [チャイブリー郡農業開発計画]. (タイ語)
 チャイパター財団 (Mulanithi Chaiphatana) HP. Philosophy of Sufficiency Economy. http://www.chaipat.or.th/chaipat_english/index.php?option=com_content&view=article&id=4103&Itemid=293 (2014 年 6 月 1 日アクセス).
 船津鶴代; 籠谷和弘. 2002. 「タイの中間層——学歴エリートの生成と社会意識」『アジア中間層の生成と特質』服部民夫; 船津鶴代; 鳥居高 (編), 201-234 ページ所収. 千葉: アジア経済研究所.
 中島成久. 2011. 『インドネシアの土地紛争——言挙げする農民たち』東京: 創成社.
 農業経済事務所 (Samnak Ngan Sethakit Kan Kaset). 2000. *Phaen phatana pam namman lae namman pam pi 2543-2549* [アブラヤシ・パーム油開発計画 2000-2006 年]. (タイ語)
 ———. 2007. *Phaen phatana sutsahakam pam namman lae namman pam pi 2551-2555* [アブラヤシ・パーム油開発計画 2009-2012 年]. (タイ語)
 ———. 2011. *Khomun phuen than sethakit kan kaset pi 2554* [農業経済の基本情報 2011 年]. (タイ語)
 Phaliphan Phungcho. 2000. The Effect of Palm Plantation on Beliefs, Rites and Social Relations of the Paknum Community, Phai Phraya District, Krabi Province. M.A. Thesis of Chulalongkorn University. (タイ語)
 Prakarn Virakul. 2011. *RSPO in Thailand—Challenges for Prosperity of Smallholders*. Presentation at Palmex Thailand 2011.
 Ramisch, Joshua; Misiko, Michael T.; Ekise, Isaac E.; and Mukalama, John B. 2006. Strengthening 'Folk Ecology': Community-based Learning for Integrated Soil Fertility Management, Western Kenya. *International Journal of Agricultural Sustainability* 4(2): 154-168.
 Richards, Paul. 1993. Cultivation: Knowledge or Performance? In *An Anthropological Critique of Development: The Growth of Ignorance*, edited by Mark Hobart, pp. 61-78. New York: Routledge.
 Rujira Phommueang. 2003. Protection for Oil Palm Agriculturists on Commercial Scale. M.A. Thesis of Thammasart University. (タイ語)
 末廣 昭. 2009. 『タイ 中進国の模索』東京: 岩波書店.
 スラートタニー県事務所 (Samnak Ngan Changwat Surat Thani). 2010. *Phaen phatana changwat surat thani pho. so. 2553-2556* [スラートタニー県開発計画 2010-2013 年].
 田中耕司. 1990. 「プランテーション農業と農民農業」『東南アジアの自然』(講座東南アジア学 第2巻) 高谷好一 (編), 247-282 ページ所収. 東京: 弘文堂.
 Walker, Andrew. 2012. *Thailand's Political Peasants: Power in the Modern Rural Economy*. Madison: University of Wisconsin Press.

テレビ番組

Hot Topic, Voice TV, 22 August 2012.

タイ官報記事

「首相府規則 国家アブラヤシ政策委員会について (仏暦 2511 年)」(Rabiap Samnak Nayok Ratamontri Wa Duai Khana Kamakan Nayobai Pam Namman Haeng Chat Pho. So. 2551). 2008 年 6 月 26 日第 135 冊特別編 107 ngo. (タイ語)

(2017 年 11 月 1 日 掲載決定)